

特252

358

集歌

桐

の

實

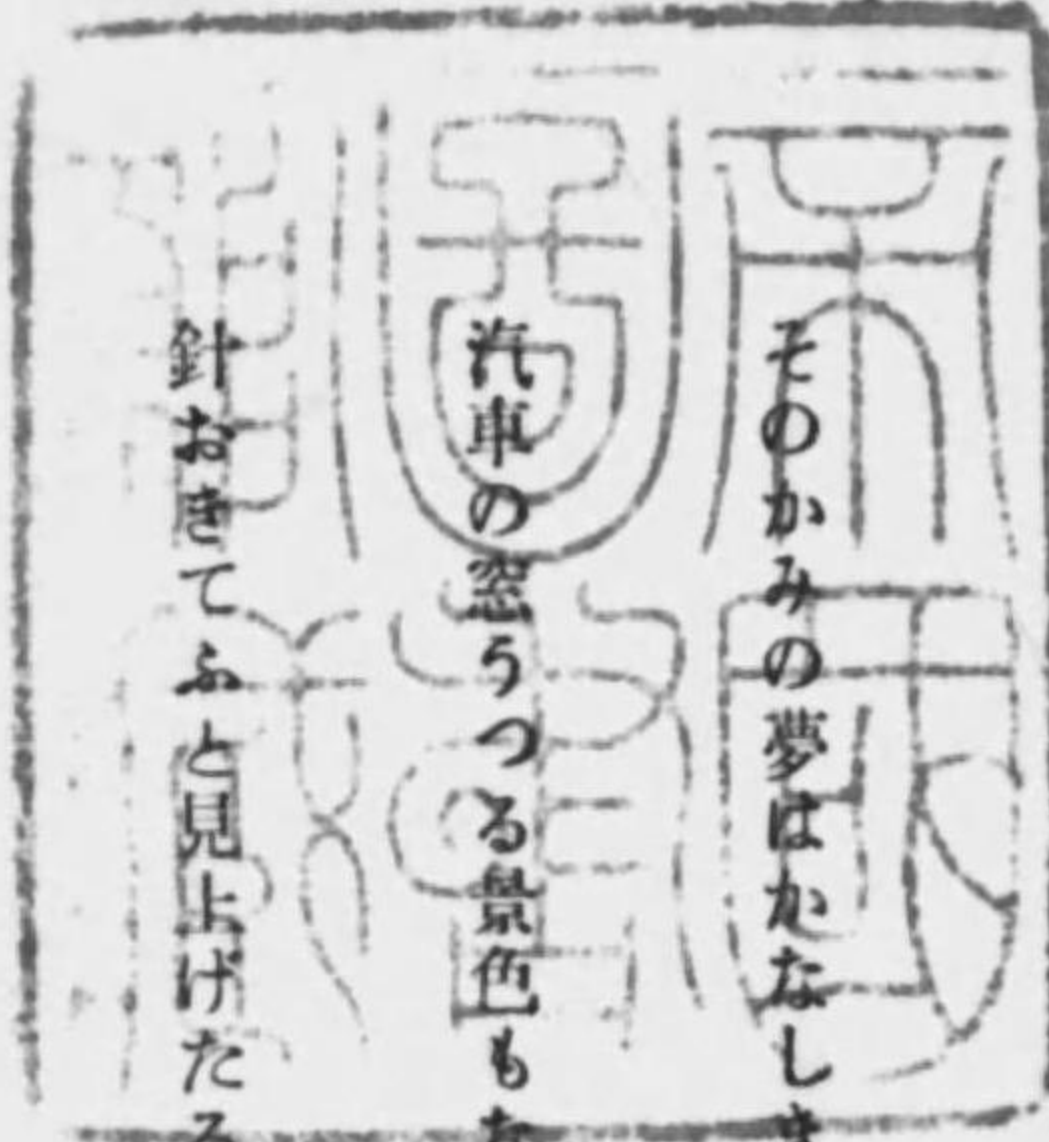


始



特252
358

四
年



賑はしき晝の濱邊は暮れゆきてキャンプのかけにたき火する見ゆ

そのかみの夢はたなしき壇の浦今静もりて夕日に映ゆる

汽車の窓うつる景色もなつかしく我が故郷に今ぞつきける

針おきてふと見上げたる大空に入道雲は湧き上りたり

夏の日を飾りし花も衰へて日毎に秋は近づきにけり

夏草の中より摘みし紫の桔梗の花に秋を思へり

内藤 ちる

堤 かよ子

西 十

坂本 富美恵

小宮 ひろ

鈴島 利枝



一

なき父の野球夢のうつし繪も今は悲しきものとなりけり

山崎しづ子

はゝそばの母の寝顔にしみじみとやつれ見出でてかなしかりけり

牟田光枝

亡き母の着物と思へば樟腦の香もなつかしき虫ぼしの日よ

式町しずえ

汽車の窓手をさしのべてた折りたし近々と咲ける山の秋草

辻末子

かりそめの人の噂に氣をいため笑ひわすれて幾日経にけむ

佐々木滋子

裏山に鳴きゐし蟬のおのづから静まるまゝに日はくれにけり

吉田やす子

切花の萩女郎花にほやかに積める車をふりかへりみる

柴田くに

變り行く夕の雲に見入りけり双子の濱に立ちもつくして

増本八重子

蚊張うちに寝ねつゝ見ればぬば玉の夜空はるけく花火あがれり(川上にて)

田久保芳子

にぎはしき集ひの中にたゞひとり交りがたく黙し居りけり

白水まき

いとけなき子らと語りし此の一日幼な心のわれに歸れり

石井いその

のびくゝと伸ばす手足もこゝろよく眠りたらひて朝鳥をきく

石崎幸子

人はみな海邊に出でてわれひとり留守居をすれはうとくゝとしぬ

宮原静子

燈籠の華やかなるも淋しかりなき父上の來ます今宵は

平方はつ

戸をくれば海原遠く渡り來し涼しき風の頬なぶりゆく

終列車待つ人々のけだるけき夏の夜深く虫の鳴くなる

縫物の手をとめて見し大空に今朝も明るく白雲のうく

かつ笑ひかつ嘆かな此の頃の我なり庭の小蟻に見入る

月冴えてこぼろぎのなく初秋の室にかそけき波の音をきく

蜘蛛のいのかすかにゆらく微風あり遠雷の折々鳴りて

名も知らぬ鳥の聲さへ聞えくる寢覺うれしき山里の朝

四

黒木 稔子

宮村 睦子

溝上 三代

大河内 妙子

江口 吉子

平田 いく

山浦 まさ

ふるさとの海なつかしみ幾たびも渚にたちて櫻貝とる

古ぼけし母の寫眞をとり出だし今更のごと眺め入るかな

秋來ぬと早も知りけん虫の音は夜毎夜毎にまさりゆくなり

ちりちりとなる風鈴を見て笑ふ幼兒の顔に夕日は落ちぬ

秋の日はあくまで晴れて走りゆく馬の嘶き大空にみつ

草取りてうつりし香なつかしみ川邊に立てば星のまたたく

雨音を湯槽につかりしみじみと聞くこの宵のしじまよろしも

五

前田 榛名

増本 篤子

西岡 美千代

藤本 ひふ子

村益 みつえ

田中 綾子

有松 秀子

秋立ちぬおき忘れたる木の下のはしこの裏にきりぎりす鳴く

母上の笑ひ給へる目に痛ししはの深さよ髪の白さよ

妹は手植ゑし花の咲きぬとて父の手をひき庭に下りゆく

何事もあきらめたりと言ふ母の涙を見ればかなしかりけり

仔猫をば捨てに行きしが寂しさにつれて歸りぬ月もなき夜

何時しかに別れの道となりたれど話はずきすしばしたゝすむ

この夏は虹も見ずしてすぐるなり雨の少なき年にてありけり

六

待鳥 春子

中島 初子

鶴田 道子

山田 照子

鶴田 みき子

中道 松子

坂本 きくの

宿なしの猫はかはゆき子を生みぬたゝきしことくやまるゝなり

夕立の通りし後の敷石に辨慶蟹の通りをるかな

草刈りて山を下れる乙女子の籠にゆれをり白百合の花

なき母の墓にとまれる赤蜻蛉暫し動かす我も黙せり

紫にくるゝ名島の島かけにむかしを語る帆柱の石

大きな犬を飼はむと思ひけり朝の濱邊を一人歩きて

石けりの子らは歸りて石筆のうすれし線の残る夕庭

七

坂本 三枝

福島 文子

川崎 好恵

藤田 吉子

栗山 一恵

保利 豊子

大庭 良子

七夕の短冊書けば思ほゆる歌かきつゝる古人を

七夕の笹の葉すれの身にしみて秋の氣配の迫る頃かな

ほそぼそと立つ線香におろがめる父のおん手はほのにふるへり

まき上げしすだれをもしし月影は團扇持つ手に青くうつれり

望月のさし入る窓にもたれつゝ書よみをれば心やすけし

しほみたる机の上の花なれど我が好き故に捨てたくもなし

朝霧のまだはれやらぬ海邊には小さき蟹のたわむれてをり

八

平野きよ子

吉原のぶ

辰野ちよ子

吉田寛子

中江一枝

坂田のぶ子

牟田口やすよ

時雨かと思ふばかりに梢よりおちくる蟬の聲の涼しさ

ふみならず砂もつめたきこの朝け沖を遙かに鷗飛ぶなり

七夕と記しさげたる短冊の秋立つ風に舞ひて散りけり

有明の空に飛交ふ海鳥の黒き翼の鮮かに見ゆ

よみおきし数ははずれて朝顔の思はぬ方に花一つ咲く

ともし火に針近づけて糸通すわが母上も老い給ひけり

ひとり居の餘り寂しく百合の花ゆすりても見ぬ夏の夕暮

針生かず代

小杉まつえ

内山美代

江頭美登

加茂笑子

瀬川つるよ

木須芳江

九

病める身に運びも軽き駒下駄の音きく宵は寂しかりけり

井上寛子

三 年

夕顔のま白き花は十六夜の月にぞ映えてあはれなりける

藤山嘉代

物書ける手をやすめては虫の音に耳かたむけぬ初秋の夜

廣井潔子

さ夜ふけてひとり書よむ静けさに牛の草はむ音もきこゆる

松尾俊子

この幾日使ひなれたる縫針の小さき音して折れし寂しさ

稲本とよ子

たらちねの親にそむきて涙ぐむおのれの性を哀しとぞ思ふ

幸谷和子

林檎かむ子らの齒音のさくさくと風絶えし夜を静かに響く

西村ふみ子

母がむく林檎のそばに子供らはまなこ見はりてその手眺むる

福田美恵子

縫物の判らぬところ尋ねたし姉いまさばとまたも思へり

吉岡秀子

夕立のやみたる後の静けさに木々の葉末の露は動かす

三輪和子

黄昏に一本咲ける月見草こよひの月を待ちわぶるらむ

岩本菊江

さらさらと寄せては返す浪の音朝の濱邊は静かなるかな

平岡佐代

颯風に残りし梨の熟れゆくを待ちて供へぬ七夕の朝

桑原敏枝

庭隅に種も蒔かぬに朝顔の日々にふとりて蕾結べり

つぶらなる瞳みはりて幼兒はおのが小さき手に眺め入る

雨までど空は明るく月出で、乾ける田の面に水まくあはれ

初咲きは亡き父上に捧げよとのたまふ兄の心うれしき

すき櫛にからむ髪の毛の多ければ母は嘆けり夏ふかむ頃

新甘諸を掬りて洗へばうす紅に冴えかゞやきてうつくしきかな

朝貌もいつしか枯れてわが庭に秋は靜かに訪れて來し

一一

藤田久代

居石君代

石倉三枝

古賀八重子

菱岡よしゑ

岩下ひで子

山下きくよ

漁火の淡き光にしばらくは我を忘れて眺め入りけり

岩をうつ潮の音のなりすみてさゞなみゆらく夏の朝かな

玄海の紺青の原を見はるかす小島に咲けるおにゆりの花

親を呼ぶあはれかなしき捨てられし子猫の聲に雨降りやまず

月見るも虫の音きくもみな淋し語りし友の今はなくして

秋風に誰の來たるや白萩にすだく虫の音はたとやみたり

夏の朝軒端に近きくものいのゆるるたびごと露はきらめく

江頭あや

岸 たつ子

濱井ふみ子

一力ふみよ

久満多鶴

柴田久子

石井みよ

一三

夕立のはれて出でたる月影に糸瓜の臍の雫涼しも

加勢田一江

雨はれて大きくゆるゝ柳あり心すがしきままに見入りぬ

堀田 緑

白壁にふとも見出でし落書にむかしのことをなつかしみけり

前川美和子

朝顔の葉のうら枯れて唇に齒ぶらしの柄の冷やかなる朝

原田 隆子

石垣の石のくづれにうづくまり心しみじみ水の音聞く

成瀬 睦子

失へる幼き心拾はんと玩具のらつばそつと吹き見ぬ

松隈・鈴子

本箱の整理にふとも見出でたるふるき日記はなつかしきかな

村山 初枝

幼な子が母にすがりて泣く様に小さくなつてみたいと思ふ

矢野三重子

白砂に我は大きく書きにけりなつかしやさし母の一字を

中島 春江

さかしげな人の眼に似てよくすみしこの大空の何處まで青き

松尾 美枝

眠られぬ夏の夜更をふときけば軒のはらんに雨こぼれ來ぬ

浦田 良子

陽の匂ひ残るふとんを敷並べ弟達は角力とり居り

藤本 芳子

ふるさとの小川にありし水車今もありやと友に文かく

藤田 くに

秋風の戸をうつ音に目さまして亡き妹のことを思へり

鬼木 澄子

母も病み姉も病みけり一人してなれぬ夕餉の仕度するなり

上田 ちさと

いさかひて叱られつゝもいづこにも従ひて來し妹逝きぬ

岩崎 八壽子

かちかちと紙芝居屋の柏子木に忽ち集ふ街の子供ら

桑原 さと

山深み萱と荊のその中に恥らひ咲ける一本の百合

松尾 八千代

立讀みの思はず長くなりぬれば要らぬ繪本など求め歸れり

西郷 八千代

はりつめし己が心もいつしかに和みて壺の花を見て居り

幸鳥 文江

二 年

しらじらと明けゆく朝の海邊には行き交ふ人もまばらなりけり

植月 邦子

母のこと書きし妹の作文に可愛ゆき言葉見出でたりけり

井上 たづ子

寂しさに山家の夜はねつかれず數へつくせり天井の板

松浦 田鶴子

大空に草笛たかく吹く時は淋しきことを忘れゆくかな

前田 静子

故郷を思ひ侘びつつ口笛を人にかくれて吹く夕かな

坂本 きよ

よきにつれあしきにつれて亡き母を思ふ心はいやましにけり

石崎 節子

ぶろべらの唸り遙かになりけり我に返りて鎌を取るかな

浦田 始

かさかさと柿の葉ゆれて中空に高く澄みたる月の夜かな

池田 久子

涼台の世間話の種つきて仰げば高し天の川あり

小野 さい

七年を飾りし壁の人形の汚れに多き思ひ出の數

權藤 まさ子

桐の樹に蟬鳴きつゞけ風もなく暑さいよいよ増しにけるかな

江口 美津子

幾度か鉛筆の芯なめるけどまだ浮ばない歌の下の句

南里 すみの

つぎつぎに船出でゆきぬ朝の海にかすかに残る油の匂ひ（呼子）

山下 千枝

夏草の思ひのまゝに生茂る崖の上をば白き雲ゆく

一ノ瀬 浦子

我が病いついゆらんとそれのみを思ひ思ひて心やすます

石井 艶子

うす暗き木立の中の古寺に今日も鳴けるか蜩の聲

櫻井 弘子

朝まだき露光り居る草原に有明の月淡くかゝれり

大弓 わかゑ

虫よけの薬の匂ほのかなる浴衣まとひてくつろぎにけり

福尾 芳枝

学校の宿題にとてピースさすその手の指のたふとかりけり

三吉野 眞砂子

佳き歌の浮びしときは嬉しかり朝の風にくちずさみ見る

山岡 文子

壁にうつる樹々のそよぎを見つめぬいとけなき子は手を伸べにけり

横山美知代

子供らがよりて營むままごとは時に小さき争おこれり

藤田みつゑ

雨上る氣配に見れば西空は雲吹き切れて黄金色なり

船岡しずか

そそりたつ巖の下に波騒ぎその名の如き立神の岩（立神にて）

桑原千代

おそくまで夕焼雲の赤くして草摘む我的手もと明るし

松尾うた子

亡き人の今宵一度の訪れを篝火たきて我は迎へぬ

菅原はつゑ

川邊吹く此の朝風の涼しかり齒磨の粉の軽く舞ひ居て

澤山鑑

母上の憂ひ多きは知りながら我儘を云ふわれのつねかな

富永孝

渚なる眞砂踏みつつゆきゆけばあわただしくも消ゆる足跡

小林邦子

かれこれと言葉のあやにとらはれて今日も詠はずやみし淋しさ

山崎康子

あの花火一つでもよいうら盆の弟の墓の前にあげたい

土居満江

校庭のどよみ遙かに聞え來る松の木蔭に一人憩へり

酒井俊枝

新らしき蛇の目の傘をさし行けば降り來る雨は快きかな

大柴國枝

ひたひたと潮は岸にみちて來ぬ櫓音靜かに舟は出でゆく

小宮とし子

長かりし夏の休みも終へかけぬまだ宿題は残りるなり

長坪すみ子

母上の膝にて深く眠りたる赤子の顔は愛らしきかな

江頭てる

こんな事我にもありしとふと思ふ塀のかけにて泣く子供見て

坂本榮子

さらさらと唐もろこしの葉はゆれぬ楽しき晝の夢を結ばむ

西方富士枝

風吹けば裏返りする葉のかけにふとも思ひし父のことかな

古賀さち

蚊遣火をたきて書讀む窓ぬちに影もさやけし十五夜の月

高田文子

夕焼に映ゆる家見て故郷の家を思ひぬ旅の空にて

柴田にしき

一 年

とりどりの色に咲出す朝顔の數よみ見ればたのしかりけり

鶴田みつ

遊ぶ時狭いと思ふ校庭も掃除の時は廣すぎるかな

木下いちえ

恐ろしき胃がんの手術傷いえて一月振りに祖父歸りけり

野崎瑞枝

次々と取り出して行く京みやげ弟の顔ほころびそむる

永尾輝

雄大な阿蘇登山者の絶え間なき坊中驛の人の多さよ(坊中にて)

中野登美子

道端に踏まれて咲けば名も知らぬ草の心もいとほしまるる

世戸みよ子

新らしき二階の出来て心地よき疊の匂ひ室に満ち居り

松本 むつ

新しき下駄の鼻緒の締りよさ心勇みて朝の街ゆく

下川 ふさ子

誰よりも先に起出て戸をひらく朝はうれしく一人ほほ笑む

井上 あき子

濃にほほづき見えてあれこれと昔を思ふ夏となりけり

池田 武子

幼子も筆取り出しぬ朝より何か書くらし星祭るとて

世戸 重子

夢さめて夢に會ひたる亡き姉の夢のつづきを見たまものかな

重 清香

父君の魂のごと墓石のそばに一本こすもすぞ咲く

山崎 ふく

なき叔母の好み給ひし十五夜の蒼き光のなつかしきかな

宮崎 國江

大いなる石のかたへにみつくばひ青き蛙は雨やたのしむ

中本 英子

七夕の軒に落ちたる紙見れば満洲國と書いてあるかな

岩本 睦子

雨はれてひととき照らふ陽に映えて蜘蛛の巣毎の露の玉かも

坂本 なな子

夕涼み團扇を持ちて出て見ればきれいな聲で虫が鳴くかな

福田 艶子

自動車にゆられながらに故郷の山珍らしく我は歸りぬ

小野 美子

海原の動かぬ風に釣に出て踊る心地でつりしきすかな

石井 みね子

暮せまる庭の垣根に白白と咲きそめにけり夕顔の花

廣井 静也

海の中覗いて見れば海藻が波もないのに靡いてゐます

石河 みつ

魂祭り父の笑顔を偲びつゝおはせし頃の懐しきかな

松尾 多枝

妹と移し植ゑたる朝顔はうす紫に咲き出でにけり

大島 操子

湯にけむる窓の硝子に太々と一の字書けば雨の降る見ゆ

元谷 きみゑ

久々に訪ね來りし此の家にをぼなき後の寂しさのあり

福島 秀子

夏休み残り五日となりにけり心せわしく今日も暮れゆく

大浦 恵美子

お盆時を知らせる如く赤蜻蛉夕焼空に飛び交ひにけり

池田 きよ子

山道の落葉の上をさくさくと一人歩いて通るさびしさ

古藤 ひさ子

睡蓮の咲きにし池を眺むればそぞろに武子の君ぞしのぼる

占部 芳子

この頃の朝の一とき楽しかり子らのよみたる歌をし見れば

入田 利美

ゆたかなる心と言葉伸びてゆく子らの姿はたふとかりけり

昭和九年九月廿七日印刷
昭和九年九月三日發行

(非賣品)

發行所 佐賀縣立唐津高等女學校

編輯人 兼 入 田 利 美
唐津市櫻馬場一二九二

印刷人 佐賀市米屋町十一番地 增 猛

印刷所 佐賀市米屋町十一番地 佐賀印刷社

終